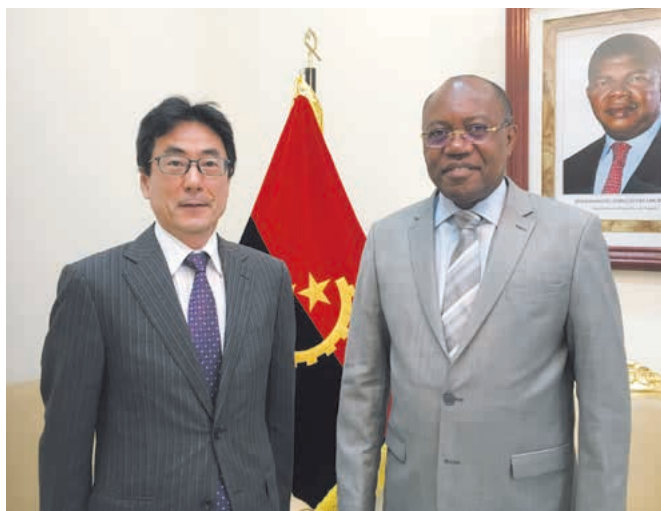




マヌエル・アウグスト アンゴラ外務大臣と

外交の担い手が ますます多様化する今日、 外務専門職への期待と その役割が急速に高まっている。

在アンゴラ日本国大使館 特命全権大使
澤田 洋典 Hironori Sawada

歴史的転換期のアンゴラで外交に携わる醍醐味

ニコルソンの名著「外交」によれば、外交には「高度の専門性と政治性が必要」とされています。外務省には四十数言語の専門家がおり、外務専門職は「言語・地域、または様々な分野について高度に専門的知識と経験を有する専門家集団」です。その知識と経験を生かして外交の最前線でダイナミックに活動するのが大使の仕事といえます。

大使としての最も大きな役割は、任国との良好な関係の構築です。そのため、任国の閣僚をはじめ、政・官・財界の要人や有識者と頻りに会い、ネットワークを構築しながら情報を収集・分析し、日本とその国との関係がどうあるべきかについての方向性を定めます。

私がアンゴラに着任して間もなく、5年に一度の総選挙が行われました。石油価格が下落し経済が低迷する中、38年ぶりに大統領が交替するとあって「アンゴラが今後どうなるのか」と日本でも関心を呼びました。そうした歴史的に大きな転換期での大使館の外交活動は、正に日本の外交政策決定に直結する躍動感のあるものです。

任国との良好な関係を構築するには、日本を正しく理解してもらうことが不可欠です。そのため、大使の重要な外交活動の一つは、様々な機会を捉え、任国のメディアやインタビュー、SNSなどを通じて効果的に日本の政策や日本の貢献(ODAや民間企業の協力)を発信することです。

また、最近は世界的に日本食ブームであり、大使公邸と公邸料理人をフルに活用して任国関係者に日本食や日本産酒を紹介しつつ、情報の収集や人脈の構築を行うことも重要かつ効果的な仕事になってきています。レストランの

シェフへの正しい日本食の指導などにより、アンゴラでの日本食ブームがさらに高まることが期待されます。

多様化する外交と求められる専門性

ポルトガルはかつて7つの海を制覇していました。そのため、ポルトガル語圏は欧州、アジア、アフリカ、中南米と世界中に跨っており、歴史的・文化的影響が今でも各地に少なからず残っています(日本にも「パン」「屏風」「かるた」などポルトガル語を語源とする単語が多くあります)。

それらの国々の中で、今ではグローバルプレイヤーとなったブラジルには、世界最大の日系社会があり、日本との間に深い絆があります(私もブラジルに3回計12年勤務しました)。また、最後の市場と言われているアフリカと日本の関係もTICAD(東京アフリカ開発会議)を中心に急速に強化されています。現在外務省には、ポルトガル語圏および国連等マルチ外交などの場で活躍しているポルトガル語の専門家が60人以上いますが、ポルトガル語圏地域の専門家のニーズと役割はかつてないほど高まっています。

今日では、外交官のみならず、市民社会を含め多くの人たちが様々な形で外交に携わっています。しかし、外交はしばしば「高度な専門性」を必要とします。その担い手の中心となるのは外交のプロであり、その役割は今後増えることはあっても減ることはありません。そのため、外務専門職への期待と役割が急速に高まっています。

将来、皆さんが外交の最前線で、日本の外交政策決定に直接つながる外交活動をダイナミックに行われることを確信しています。

Career

1980年 外務省入省
1995年 在ブラジル日本国大使館
一等書記官
1999年 大臣官房国際報道課
課長補佐
2001年 総合外交政策局総務課
課長補佐

2003年 中南米局中南米第一課
課長補佐
2007年 在ブラジル日本国大使館
参事官
2010年 在シカゴ日本国総領事館首席領事
首席領事

2013年 大臣官房人事課
企画官
2015年 大臣官房人事課
調査官
2016年 駐アンゴラ日本大使